
マトリクス 生み堕すモノ

桜クライアント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マトリクス 生み堕すモノ

【Nコード】

N6364D

【作者名】

桜クライアント

【あらすじ】

サアアと音を立てながら風を切る。ボードはたくさん風を浴びられるから好きだ。「そう思うだろ？シド」返事はない。寝ているんだろう。まあいいか。もうすぐ町に着く。町に着けばご飯の匂いに釣られてシドも起きるさ。「さて、あと少しだ！」キュイとペダルを踏み込み、僕は速度を上げた。

存在しない頁：プロローグ（前書き）

この作品は、

一部グロテスクな表現を含む場合があります。

そういう表現が嫌い、もしくは、もう遣伝子が受け付けないとかそういう人は回れ右してください（・・・）

とはいえ、私はまだまだ未熟ですが：

どうぞ、御覧になって言ってください

存在しない頁：プロローグ

…なあ、シド。

もし…

…そうだね。

今はとにかく走ろう。

それしか、

できないしね

サアアと音を立てながら風を切る。

ボードはたくさん風を浴びられるから好きだ。

「そう思うだろ？シド」

返事はない。

寝ているんだろう。

まあいいか。

もうすぐ町に着く。

町に着けばご飯の匂いに釣られてシドも起きるぞ。

「さて、あと少しだ！」

キユイとペダルを踏み込み、速度を上げた。

「あ、町が見えたよ」

ペダルの踏み込みを弱め、速度を落とす。

左足を地面に降ろしながら右足でヒールを蹴り上げると、くるくると回転しながら腕の中に収まった。

着地に微妙に失敗したけど。

「ヘタクソ」

起きた見たいだ。

でも起きて早々けなされるとは思わなかったな。

「起きて早々それはないんじゃない？」

「うるせえヘタレルク」

寝起きだから機嫌が悪いのかな。でもヘタレルクはひどいよな。

「寂れた町だな」

「そうだね。なんとなくPFFも薄いし」

ボードのノリが悪い。と僕は続けた。

「そんなにライディング好きかよ」

「風を浴びられるからね。でもここはあんまり気持ち良くないよ」

シドは知ったことかと言うと黙りこんでしまった。

さて、どこか飲み物が飲める所はないかな。

きよろきよろと見回しながら、人がまばらな町を歩いていく。

「あ、ここなら何か飲めそうだ」

するとシドが

「また聞くのか？」

ふと立ち止まり、考えた。

「…うん、それも目的見たいなものだしね」

カランと寂しい音のする鐘のついたドアをゆっくりひらいた。

扉を開け中を見渡すと、

いらつしやい。とこの店の主人であろつまスツとした顔のおじさんが迎えてくれた。

「ここ、飲み物がありますか？」

「ああ、あるよ。コーヒーでよければね」

ふと、主人が僕のボードに興味を示した。

「…風乗り…ライダーか」

「あ、はい」

「ライディングはいい。風を直に感じられるからな」

いいボードだ、と褒めてくれた。

この人はいい人だと、そう思った。

『安易だな。つか馬鹿だろ』

心の中でぼそりとシドが呟いた。

『いいだろ。ライダーを風乗りと呼ぶのはいい人だけさ』

ケツと言うとシドは黙りこんだ。

「どうしたんだ？」

「あ、いえ」

ずっと椅子に座ろうとすると、

「ウェイトレスはいないからカウンターに座ってくれ。ほら」

そう言って椅子を勧めてくれた。

「ここらはどうだ。風の調子は」

「PFFが薄いです。風が清々しくないというか」

率直な感想だ。

「はは、確かに最近PFFが薄いな。風の匂いも変わってきてる。待ってる。コーヒーを持ってきてやる」

主人はかたと音を立て、後ろの扉の中へ消えていった
「聞かねえのか」

シドが言った。

「いいや？まずはコーヒーを貰おうかと思って」

「コーヒーより紅茶派だろ？」

「でもコーヒーもおいしいよ？」

そんな他愛のない話をしているうちに、主人が戻ってきた。

「どうぞ」

コトリと置かれたカップからは、コーヒーの良い香りがした。

「美味そうな匂いだ」

ん？と主人が怪訝な顔をしたので

「いいえ、おいしそうですね」

と言っておいた。

『心の中で喋ってよ』

『ついだよ。そんな怒んじゃねえよ』

ついでに疑われるじゃんか。気をつけて欲しいよ。

『うるせえな…』

シドは放っておき、コーヒーを飲む。

「…いい匂いですね。何を使ってるんですか？」

「私のブレンドだよ。調合法は秘密だ」

コーヒーを飲み終わると、主人は僕からカップを受け取り洗い始めた。

『…そろそろ聞いたらどうだ？』

…やはり気が引ける。

『何を今更…さあ。聞けよ』

…うん。

椅子に座り直し、主人を呼ぶ。

「あの、」

「なんだい？」

「『パーティクル・ディストーション』を知っていますか」

主人はふつと笑い、哀しそうな顔をして

「知っているよ」

と答えた。

「あまり話したい話題じゃあないがね」

「それは承知の上です」

しっかりと主人を見据えると、ゆっくりと主人は口を開いた。

「私は…うむ。公開されていた情報しか知らんぞ？」

構いません。と続けた。

「…7年前の大災害だろう？エノレイル国境付近で」

世界はその日、大混乱に陥った。

7年前。僕が9才の時だ。

エノレイル国境付近。

バーティカルディストーション

『粒子の奔流』の原因とも言われた戦争が起きた。

エノレイル

帝国軍勢75000。

グラナドフ

共和国軍勢89000。

エノレイルの劣勢は明らかだった。

撥ねる血潮。

世界が朱に染まって行つた。

しかし、

エノレイルは異常な軍備と大量の兵士を保有していて、他の国を置き去りにするほどの科学力を持っていた『はず』だった。

時のグラナドフ大總統は

「おかしい」と、不気味に思っていた。

だが、その後もエノレイルが劣勢を覆す事はなく、詰め将棋のような悲しい戦争が続いた。

戦争が始まってから43日。

エノレイルはおかしな動きを見せた。

最後の最後。

グラナドフ共和国軍勢がとうとう最後の砦と言われた『アラガノフの砦』を突破した。

そして、城壁前にたどり着いた時、グラナドフ軍勢は啞然とした。

城壁を護るべき兵士が一人も居なかったのだ。

これは好機と攻め込もうにも、明らかすぎる罠の臭いが、グラナド

フ軍勢の侵攻を遅らせた。

そして、

グラナドフ軍勢。

その時、56000。

それが、

一斉に消え去った。

通信が途絶えたと同時にエノレイル帝国全体が光を上げた。

これが、後に”粒子の奔流”《Particle-Distortion》と呼ばれる災害だ。

この日を境に

パーティクル
Particle
フォー
For
フローティング
Floating

通称PFFが世界に充満した。

世界中に光が満ち、
その光は、

人を奪った

災害前まで67億近くいた人口はいまや49億にまで落ちた。

村一つ飲み込んだところもあったという。

そして、災害がもうひとつ産み出した物があった。

大地侵蝕《Ground Hack》

大地侵蝕は、その名の通り大地が侵蝕される現象だ。

PFFは

バラバラに宙に舞い、分散している分には強い力を持たない。

しかし、一点に集中的にPFFが集まると、それは大地を喰らうほどの力へと変貌する。

大地を喰らう。具体的にどういうことか。

それは、PFFの大きな”波”が大地を押しつぶし

PFFに還元してしまうことで、その場の全てを消し去ってしまう。その跡形も残らぬ光景から、大地を飲み込む、大地侵蝕と名付けられた。

大地侵蝕は不定期、かつ何時起きるか特定することが出来ないためいくつかの町や村が、その被害を受けてきた。

「私も、粒子の奔流の被害者さ。妻と子供を失った」

やはり、この人も被害者…か。

「なぜ…いつそのこと私も連れ去ってくれなかったのかと、未だに思っているよ」

まあ、いまじゃ涙は流れんがね、と苦い顔で彼は笑った。

「…悲しみは過ぎると、涙を涸らしますからね」

「ああ、私の悲しみは涙じゃ癒せんよ。時間だけだ。私を救うのは」

そうですか…と僕はそれしか言うことが出来なくなった。

『ほれ、もうひとつ、聞くことがあるだろうが』

…この空気で？

『俺はそんな読めねえからな。とつと聞けよ』

……さすがに…

『うつせえ、早くしろ』

俺はこんな町早く出たいんだとシドは言った。

「…あの、店長さん」

なんだい？と頭を上げて僕に向き直った。

「…また質問いいですか？」

「ははっ。粒子の奔流以外の話題なら聞こうか」

「…すいません」

「いや、いいよ。続けて」

すうと息を吸い込み、

「グリモアという名を聞いたことがありますか」

「グリモア？いや、聞いたことがないな」

やっぱり…

返ってくる答えはいつでも同じだ。

知っているものなど居るわけがない。

なのに、聞く

一縷の望みを賭けて。

「…わかりました、おいしいコーヒーありがとうございました」

椅子から立ち上がりいくらですかと店主に聞く。

「代金は要らんよ。話をしたら随分楽になったからね。そのお礼だ」

「ですがそういうわけにも…」

「いや、おごらせてくれ。頼む」

僕をまっすぐに見てそう頼んだ。

…ああ、この人は『知っている』んだ。
意味が無いことを。

『こいつ…』

たぶんね

「もしかして…」

「ああ、そうだよ」

…これ以上聞く必要もないだろうと思い
店を後にした。

「つと、店長さん！ここにいい燃料屋がありますか？」

「南の丘に行くといい。腕の良い親父さんがいる。クラフトの紹介
だと言えば安くくらはしてくれるはずだ。ハルケンという人だ」

ありがとうございましたと一礼し、ボードに飛び乗った。

「ここがハルケンさんの家かな？」

こんにちわーと叫んでみるが、返事がなかった。

「いないのかな？」

きよろきよろとしていると

「なにをしとる」

「うわっ！？」

「…なんのようだ？」

その人は、後ろに燃料屋独特の、
銃を打ち込む機械、パイルバンカーを握っていた。

「あ、あの。ハルケンさんですか？」

ぎよっとおどろいた風な顔を見ると、

「ああ、俺がハルケンだ」

そう答えてくれた。

「燃料を買いにきたのか」

「はい。北へ行こうと思ってるんですが、燃料が切れかけてまして」

「…風乗りか。こちら辺はどうだ。乗りにくいだろう」

あ、この人は（以下略

率直に、答えをだした。

「はい…正直な話、波に乗りにくいです。PFFが薄いですね」

商売あがったりさとハルケンさんは言った。

「PFFが無きや燃料は作れん。最近は大地にすらPFFが無くなつてきとる。”槍”が打ち込みにくくなったよ」

「大地をPFFに還元する方法で燃料を？」

「ああ、そうだ。詳しいな」

「ええ、燃料屋で働いたことがあります」

そうか、とハルケンさんは悲しそうな目をした。

「なら分かるだろう？ここがどうなるか」

「…ええ」

がっはっはと

豪快に笑ったハルケンさんはひとしきり笑った後
こっちへ来いと僕を促した。

ハルケンさんについていき
僕はまず感動してしまった。

「…すごい……ですね」

ハルケンさんはだろう？と自慢げにわらった。

「ここで燃料を作る。とはいえ、最近はこんな純度の低いものしか
つくれんがな」

そういつて見せてくれた固形のPFFの結晶は黄色をしていた。

純度の高いPFF結晶は碧色をしている。

「…このPFF濃度じゃしょうがないですね…」

「そうさ。こんな純度じゃ職人は務まらない。プロは妥協する、だが、
職人は妥協しちやいけねえ。とにかくいいものを、どれだけ手間隙
かけようが、それが職人ってモンだ」

いい人だ。

自分の職に誇りを持つてる。

「逃げないんですか？」

「希望は棄てん、いや、棄てられん。良い結晶を、また作るまではな」

「……」

僕は、言う言葉が無くなってしまった。
こつという人には圧倒されてしまう。

…

「燃料を探していたんだったな。最近一番良く出来た結晶だ。もつて行きなさい」

そういつて投げ渡されたそれは、
まるで吸い込まれそうなほど深く
美しい碧色をしていた。

そして、市販なんかとは比べ物にならないほど
透き通った、美しい結晶だった。

「…こんなもの…受け取れないです…」

「がははは！まあ、それなりの代価を君が寄こしてくればいいのさ。どうせ、もう客も来んだろっ」

深い、言葉だった。

「…では、12万Zeeお支払いします」

「がっはははは。こんなにはいらんさ。その半分にまけてやる感謝

しろい」

どういつても12万Zee1受け取ってくれそうに無いので
6万Zee1を渡すと

「…達者でな」

そう言ったハルケンさんは
とても儚い笑顔を、僕に向けた。
まるで、今にも泣き出しそうな笑顔を。

ついさつき出会った僕に

こんな顔をみせてくれるこの人は
とても豊かな”ひと”なのだろうと
僕はそう思った。

「…”その時”まで…お元気で」

ひらひらと僕に手を振るハルケンさんを背に
僕は…

「…次はどこへ行こうか？」

「さあてねえー…んー…北だな！今の気分は北！」

「北…か、ここが旧エノレイル南部だから…ノースザルドだね」

「お、ノースザルド甘味通り！ちょうど行きたかったぜ！」

…甘いもの…好きだなあ

「…食べるのは僕なんだけど…」

「辛くなったら代われ！2倍喰える！」

「ムリだよ」

そういつてぼくは笑った。

「さて、じゃ、北に向けて全速前進だね」

「おう」

ボードを腕から放すと
ふわりと浮き上がる。

その浮く力に反発するように下に押し付けながら走り出す。

そしてPFFが緑色に光り始めたくらいで
ボードを一気に押し付け飛び乗る。

靴をビンディングにカチツとはめ込み
ペダルをくいと踏む。

速度があがる。

風が…気持ちいい。

「さ、スピードあげろ！」

「ん。行こうか！」

思いつきりペダルを踏み込み、

僕らは北へ進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6364d/>

マトリクス 生み堕すモノ

2010年10月8日13時17分発行